

Keiba Global Front Line



競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します

合田 直弘

5月2日にチャールダウンズで行われた開催で、2競走に出走した3頭の日本調教馬はそれぞれ存在感を示した。中でも現地の関係者やファンによる大きな注目を集めたのが、日本調教馬ながら生産地は米国だったテオーエルビス（牡4）とダノンバーボン（牡3）の2頭だ。両馬の父親は、日本の競馬ファンにはあまり馴染みがない種牡馬で、今回のコラムはその2頭をご紹介させていただく。

ケンタッキードービーのアンダーカードに組まれたG1チャールダウンズS（d7F）を3^{1/4}馬身差で快勝したテオーエルビスの父は、ケンタッキーク州のスリーチムニーズファームで供用されているヴォラタイルだ。トップラインは、その父ヴァイオレンスから、メダグリアドーロ、エルブラド、サドラーズウェルズを経て、5世代目にノーザンダンサーがいる父系である。ヴォラタイルの牝系は、祖母がG1テストS（d7F）勝ち馬レディータックで、叔父に日本で走りG3京阪杯（芝1200m）2着など重賞入着が2回あったエイシンスパルタンがいるファミリー。キーンランド9月1歳市場にて85万ドル（当時のレートで約9395万円）で購入され、S・アスムッセン厩舎に入厩した。

3歳7月という遅いデビューで、エリスパークのメイドン（d6F）を制し緒戦勝

ち。3戦目となったチャールダウンズのアロウワンス（d6F）で2勝目をあげると、快進撃がスタート。そこから4連勝でサラトガのG1AGヴァンダービルトS（d6F）を制し、重賞初挑戦でG1制覇を果たした。

その後、右前管骨に亀裂骨折が見つかり現役を引退。21年に種牡馬入りし、初年度の種付け料は1万7500ドルだった。テオーエルビスは、その初年度産駒の1頭となる。これまでも、G3インディアナダービー（d8.5F）をレコード勝ちした他、G1シャンプンS（d7F）2着の成績を残したティップトップトーマスなど3頭の重賞勝ち馬を送り出していたが、G1制覇を果たした産駒は、テオーエルビスが初めてだった。

そして、ケンタッキードービーで果敢に先行し、3〜4コーナー中間で先頭に立つという見せ場たつぷりの競馬をしたダノンバーボンの父は、ケンタッキーク州のダーレーアメリカで供用中のマックスフィールドだ。同馬は、ゴドルフィンによるアメリカにおける自家生産馬。トップラインは、父ストーリートセンから、ストーリートゥライ、マキャヴェリアンを経て、4世代目にミスタープロスペクターがいる父系だ。牝系は、祖母がG3ボーカーS（芝8F）、G3アシニアS（d9F）など路面を問わず3

重賞を制したケアレスで、叔父にG1ホープフルS（d7F）勝ち馬スカイメサがいるファミリーを背景に持つ。

B・ウォールシュ厩舎から2歳9月にデビュー。チャールダウンズのメイドン（d8F）、続くG1ブリーダーズフューチュリティ（d8.5F）、3歳初戦となったG3マツトウインS（d8.5F）をいずれも制し3連勝を飾ったが、その後、右前脚第3中手骨顆骨折を発症。7カ月の戦線離脱を余儀なくされた、3歳暮れに復帰すると、4歳秋まで8戦。G1クラークS（d9F）を含む4重賞を制した他、G1ホイットニーS（d9F）2着、G1ウッドウォードS（d9F）2着などの成績を残した。22年に種牡馬入り。初年度の種付け料は4万ドルだった。

ダノンバーボンは、その初年度産駒の1頭となる。昨年10月にアケダクトのG1フリゼットS（d8F）で3着となったファイバーズ、5月2日にケンタッキードービーのアンダーカードとして行われたG2バットデイS（d8F）で2着となったイングリッシュマンらを送り出しているが、重賞勝ち馬はまだ登場していない。

テオーエルビスもダノンバーボンも、若手種牡馬の先物買いで「当たり」を引いたわけだ。日本人関係者の目利きの確かさは、慧眼に値すると言えよう。